

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330205

研究課題名(和文)創造的学びや共感性を育む子ども主体の対話型教育の開発と支援

研究課題名(英文)Development of effective child-directed classroom teaching through "discussion and reciprocal learning"

研究代表者

丸野 俊一 (maruno, shunichi)

九州大学・人間環境学研究院・特任教授

研究者番号：30101009

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円、(間接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、対話型授業に焦点を定め、(1)教師の対話方略の運用の仕方・変化、(2)創造的対話が生起するために不可欠な心的要因に対する子どもの気づき、(3)教師の認識論の違いと授業形態との関連、(4)批判的思考や共感性の育成の変化の様相を解明した。

その結果、(1)教師の対話方略の運用は子どもたちの対話力の水準に依存する、(2)対話の生起には、異なる考えを認め合う、他者の視点を共有し、自分の考えを省察することの重要性に気づく、(3)授業スタイルは、教師が抱く認識論に大きく依存する、(4)対話型授業の中では、創造的・批判的思考のみでなく、情動的な共感性も育まれることが分かった。

研究成果の概要(英文)：Purposes of present studies were to examine the following four problems and develop the effective dialogic-centered classroom teaching(DCCT) method. Four problems were as follow: (1) how teachers develop their discourse strategies to establish the DCCT, (2) how students aware and learn the meaning of classroom ground-rules from reflection and from each other, (3) how classroom teaching-style are depend on personal epistemology, (4) how children cultivate not only critical thinking but cognitive- or emotional empathy through DCCT.

Main findings were as follow: (1) teachers change their discourse strategies according to levels of children's dialogical collaboration, (2) opportunities for sharing others points of view and reflecting upon the students' own standpoint are essential to the deeped DCCT, (3) teaching style are depend on his/her personal epistemology, and (4) The levels of teachers' expertise for DCCT influence those of cultivation of children's critical thinking and empathy.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：対話型授業 創造的思考 共感性 自己省察

1. 研究開始当初の背景

(1) 知のグローバル化社会を迎え異文化の人々との創造的議論(CrDi)や協働構成による問題発見・解決力の育成が、また立場の異なる人々とのコミュニケーションや協調性や共感性や創造性を育む子ども主体の授業作りの改革が教育的・社会的にも重要となり、今や国家レベルの緊急課題となっている。

(2) 日本の学校教育現場では、知識伝達型授業が中心であり、対話力や説明力などを育む対話型授業が少なく、教師の実践技能の育成や授業観の見直し、さらには対話型授業の定着化が求められている。

(3) 子ども主体の話し合う・学び合う対話型教育のなかでは、ものの見方や考え方という創造的・批判的思考力の高まりのみでなく、情動的な絡み合いを通じた共感性(認知的・情動的)や社会的協調性が育まれる可能性がある。だが、従来の研究においては、前者の育成のみに焦点が当たり、後者についての体系的な縦断研究が皆無であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、小学校現場に入り、教育現場の実践家と”学びの共同体づくり“を行い、子ども同士が教え合い学び合う協働的な学びを創造する授業(Child-directed classroom teaching through "discussion and reciprocal learning":以下:CTDRL 授業)作りの定着化を目指し、デジタル教材や教育支援システムの開発により教師の実践力の向上を図る。

(2) 特に、①CTDRL 授業による実践過程を可視化し、問題点の発見・改善策を提唱する新たな分析手法の開発、②CTDRL 授業実践過程での“誤り事例集”の教材化を通し多様な教育方法や学習の実現化を図る、③子どもたちは、対話型授業に積極的に参加し、創造的対話を発揮するためには、どのような心理的要因が関与していると認識することが必要か、④教師のCTDRL 授業を改善する学習・教育環境作りと実践技法を開拓し、子どもの創造的学びや相互に協調・助け合う認知的・情動的共感性の発達過程の解明を行う。

3. 研究の方法

(1) CTDRL 授業の実践過程や熟達化水準を可視化する指標として 子ども同士、教師と子どもの思考連鎖による単語間推移性分析を用い、問題点を客観的に評価する分析手法を開発し、対話型授業実践力の熟達化の水準によって、子ども同士の時間軸を越えた思考の関連付け(思考連鎖)が、どのように異なるかを分析する。

(2) 教師が自のCTDRL 授業実践力を診断・評価し自己改善を図る熟達化モデルを心理的距離、対話の進め方(責任制の配分)、適応的メタ認知、PDCAによる実践過程の変容を縦断的観点から分析・開発する。

(3) 教師の認識論(教育観・子ども観・知識観・教材観など)や信念の違いと対話型授業実践力の熟達化との間には、どのような関係がみられるかを明らかにし、従来の技術論のみからの教師の実践力向上への教育支援の問題点を指摘すると同時に、新たな観点からの教育支援策を構築する。

(4) 教師と子どもの両視点からCTDRL 授業を改善する学習・教育環境作りはCTDRL 風土の共有化(Fig.3) 相互の考えを繋ぐ・絡める技法、議論スキーム、コメント・質問力、自己内・他者間対話、説明力などの質的变化を追跡研究していくことで明らかにする。

4. 研究成果

(1) 教師の認識論の違いによって、対話型授業実践の形態や様相が大きく異なり、その差異は、特に、①子どもの考えを授業展開の重要な手段・道具にできるか否か、②授業展開での責任制の配分の仕方、③授業展開場面で、頻繁に遭遇する”躓き・淀み“状況にどのように対処するか心理的距離の取り方に、影響することが分かった。

(2) 子ども主体の対話型授業実践過程や教師の熟達化水準を可視化し、問題点を客観的に評価する分析手法の開発を試み、“子ども教師 子ども”の三項関係の発話連鎖、特に、思考過程を前後に往還する中で、時間軸及び状況を越境した発話連鎖が重要な指標となることを明らかにした。

(3) 教師の対話型授業実践力の熟達化水準の変化過程を縦断的に分析し、各教師の既成の実践枠組みに対する”思い込み“(「有能性の罫」)からの脱却のためには、他者の目を通じた批判的吟味による研修の場に、自己の実践を曝け出し、他者からのコメントを素直に前向きに受け入れ、自己研鑽を図る勇気と前向きな学びの姿勢(self-reflection through social metacognition)が重要であることを明らかにした。

(4) 対話型授業実践を効果的に展開するためには、教え手(教師)・学び手(子ども)のメタ認知を如何に向上させるかが重要であるが、授業実践活動での両者の相互作用過程での学びの質的分析を行った結果、教え手・学び手のメタ認知の改善を促す重要な心理的要因として、“躓きからの学びを保証する場づくり”間の取り方”心理的距離の取り

方”責任制の配分”情動のコントロール“などが明らかになった。

(5) 子ども主体の話し合う・学び合う対話型授業の中では、①創造的・批判的な思考の高まりのみでなく、②他者が発言できなかったり、説明するのに困難を抱えている時に、その心の葛藤を自分のこととして感じ取り、発言が生まれるまでしっかりと待つ姿勢や、何らかの手を差し伸べるといふ、共感性や社会的協調性や思いやりの心も育まれることを縦断的分析を通して明らかにした。また、③子どもの認知的側面や情動的側面の变化過程と、教師の諸観(知識観・授業観・学習観。子ども観・教材観など)との間には、密接な相関関係があることを解明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

- ①野村亮太・丸野俊一 授業を協働的活動の場として捉えるための認知的信念 仮説的世界観指定仮説の検証、教育心理学研究、査読有、62 巻、2014、印刷中
- ②丸野俊一 メタ認知を育むには リハビリテーション教育研究、査読有、18 巻、2013、22 - 26
- ③高垣マユミ・松尾剛・丸野俊一 朝の会におけるグランド・ルールの共有を図る教師の働きかけ 教室談話のカテゴリー分析及び解釈的分析を通して 教授学習心理学研究、査読有、9 巻、2013、29 - 36
- ④尾ノ上高哉・丸野俊一 いかにしたら児童たちは、学び合う授業の中で「自分の考え」を積極的に発言できるようになるか 教授学習心理学研究、査読有、8 巻、2012、26 - 41
- ⑤野村亮太・丸野俊一 個人の認識論から批判的思考を問い直す、認知科学、査読有、19 巻、2012、9 - 21
- ⑥尾ノ上高哉・丸野俊一 学び合う授業の中で育まれる認知的・情動的共感性、教授学習心理学研究、査読有、8 巻、2012、12 - 25
- ⑦奈田哲也・堀憲一郎・丸野俊一 他者とのコラボレーションによる課題活動に対するポジティブ感情が知の協同構成過程に与える影響 教育心理学研究、査読有、60 巻、2012、324 - 334
- ⑧尾ノ上高哉・丸野俊一 学び合う授業の

実現に向けて、教師は如何に談話方略を運用しているか、教授学習心理学研究、査読有、7 巻、2011、39 - 55

〔学会発表〕(計 3 件)

- ①丸野俊一 応答的な「話す」「聴く」行為が紡ぎ出す「創発的な学び」を求めて 第 126 回全国大学国語教育学会名古屋大会 2014
- ②丸野俊一 子ども主体の話し合う・学び合う授業実践力の向上を目指して 第 9 回日本教授学習心理学会(福岡、九州大学)、2013
- ③丸野俊一 メタ認知を育むには 第 25 回リハビリテーション教育研究大会(福岡、国際医療福祉大学)、2013

〔図書〕(計 2 件)

- ①丸野俊一 協調学習 日本発達心理学会編「発達心理学事典」、丸善出版、2013、130 - 131
- ②丸野俊一 話し合いの技法、茂呂雄二他「状況と活動の心理学」：コンセプト・方法・実践、新曜社、2012、178 - 181

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸野 俊一 (MARUNO, Shunichi)
九州大学・人間環境学研究院・教授
研究者番号：3 1 0 1 0 0 9

(2) 連携研究者

松尾 剛 (MATUO, Go)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：5 0 5 2 5 5 8 2

(3) 連携研究者

野村 亮太 (NOMURA, Ryouta)
日本学振特別研究院 (P D : 東京大学教育
学研究院)
研究者番号：7 0 5 4 6 4 1 5

(4) 連携研究者

小田部 貴子 (OTABE, Takako)
福岡工業大学・特任教員
研究者番号：8 0 5 6 7 3 8 9